



\ \ / / / /  
注目  
動物骨



# 目次

ごあいさつ.....	1
● 骨からわかること.....	2
● 動物骨の同定方法.....	3
● Column I サルをペットに？.....	4
● 埋められた動物たち.....	5
● Column II 並べられたブタの頭！？.....	6
● Column III 壺の中のブタの骨.....	7
● 骨製品.....	8
● 骨に残る痕跡.....	13
最後に.....	15
参考文献.....	16

## 【凡例】

1. 本図録は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展『動物骨と骨製品』（開催期間：令和5年10月11日～11月26日）の展示を補完するものとして編集・作成しました。
2. 許可なく本書の複製及び転載、複写を禁じます。

## ごあいさつ

沖縄の先人たちは、サンゴ礁に囲まれた島々で独自の文化を育み、豊かな海の恵みを得ながら生活を営んできたと考えられています。その証として、県内の多くの遺跡からは多数の貝殻や貝製品が出土しており、このことから沖縄諸島の先史時代（縄文時代早期～弥生平安並行期）は「貝塚時代」とも称されています。しかし、食料となり、製品を作るための素材として使用されたのは貝だけではありません。動物も食料となり、その骨も長きにわたり、実にさまざまな道具や装身具として活用されてきました。

動物骨を利用した実用的な道具としては骨針や骨錐などがあり、私たちが日々使っている歯ブラシの柄にも骨製のものが出土しています。装身具としては腕輪や簪が出土しており、骨は単なる食料残滓ではなく、身近にある非常に優れた素材であったことがうかがえます。

また、遺跡からは動物骨がまとった状態で出土することがあります。丁寧に埋められたと考えられるもの、魔除けのような役割を担っていたと考えられるものなどがあり、これらは当時の人々の精神文化を知る重要な手がかりとなります。

今回の企画展を通して、多くの方々が沖縄の先人たちと動物との多様な関係性に触れるとともに、埋蔵文化財としての動物骨と骨製品の価値やその重要性について理解を深める一助となれば幸いです。

令和5年10月11日

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 前田 直昭

# 骨からわかること



遺跡からは土器や石器、貝などのほかに動物骨やそれを素材として作られた骨製品が出土することがあります。動物骨をよく観察すると、動物の種類や食生活が分かるほか、カットマークと呼ばれる解体された痕跡が見つかることもあります。カットマークは解体、調理や製品の素材を切り取る際にできると考えられ、骨製品とともに当時の暮らしや技術を知る手がかりとなります。また、動物骨は出土状況によって、その動物が人とどのような関係にあったのか、当時の精神的な部分まで垣間見ることができます。



動物の骨・骨製品



当時の食べ物



動物の種類



当時の暮らしや製作技術

## 動物骨の同定方法

遺跡から出土した動物骨は、全身がそろっていても細かい破片になっているなど一見しただけではどの動物の骨かよく分からぬことが多いほとんどです。

出土した骨はどんな動物の、どの骨か？それを調べるために埋蔵文化財センターでは、所蔵している現生標本と比較し、判別が難しいものは専門家に見てもらうことで、種類や部位を同定しています。

### Animal BONES

#### ブタとイノシシの違い

ブタはイノシシが「家畜化」した動物で、イノシシと見分けるのはかなり難しい作業となります。分かりやすい違いとしては、やわらかい餌を与えられたブタは、噛む筋肉や顎への負担が減ることで、①頬や頬骨の幅が広がり、顎骨が小さくなります。これにより、②第3後臼歯と呼ばれる、人でいうところの親知らずが生えにくくなるのも特徴です。また、筋肉の使い方にちがいがあるため、③上腕骨の孔がみられなくなります。



左：ブタ頭骨（普天間古集落遺跡／宜野湾市）  
右：イノシシ頭骨（現生標本）



左：ブタ上腕骨（中城御殿跡・櫻園跡／那覇市）、右：イノシシ上腕骨（現生標本）

# Column I

## サルをペットに？

首里城跡ではサルの骨が35点出土し、DNA分析からヤクシマザルであることが分かりました。骨の形状や歯が生えた時期などから10歳前後のメス1匹と5～6歳のオス1匹であり、一緒に出土した陶磁器から16～17世紀頃のものと推定されます。文献史料から薩摩より取り寄せたと考えられていますが、なぜ取り寄せたのか具体的な目的は分かっていません。しかし、出土した骨には火を受けた痕跡や解体された痕跡がみられなかったこと、歯のすり減り具合などから食用ではなく、首里城内で飼育されていたと考えられています。

沖縄県内ではその他にも勝連城跡（うるま市）でオウム科の骨が出土しており、外国からペットや観賞用として輸入し、飼育していたと考えられています。



ヤクシマザル（首里城跡管理用道路地区／那覇市）

# 埋められた動物たち

遺跡からは稀に、全身がきれいに揃った動物の骨が出土することがあります。なかでも、地面に掘られた穴（土壌）から見つかり、骨の位置に乱れない状態の場合は、埋葬されたと考えることができます。大嶺村跡（那覇市）では埋葬されたウマが出土しています。体の大きさや乳歯から洋種の幼馬であり、当時、小禄海軍飛行場が所在していたことなどから軍馬であった可能性があります。顎の骨にまで進行した虫歯がみられることから、糖質の豊富な餌を与えられてはいたものの、適切な飼育管理はできていなかったことがうかがえます。死因についてはよく分かっていませんが、大嶺村跡のウマは戦争と動物との関わりを今に伝えてくれます。

その他にも喜友名グスク（宜野湾市）では、土壌内から1頭分のウシが出土し、周囲には土器片や青磁片が出土したことから、埋葬されたと考えられています。これらの動物たちは、食用や道具の素材となった動物とは異なる人との繋がりがあったのかもしれません。



ウマ埋葬跡（大嶺村跡／那覇市）



ウシ埋葬跡（喜友名グスク／宜野湾市）

お墓の入り口やお墓の中に、ブタの頭や下顎だけが埋められていることがあります。これらは民俗事例から、お墓が完成した後に魔除けとして埋められたと考えられます。



19号墓（普天間石川原古墓群／宜野湾市）



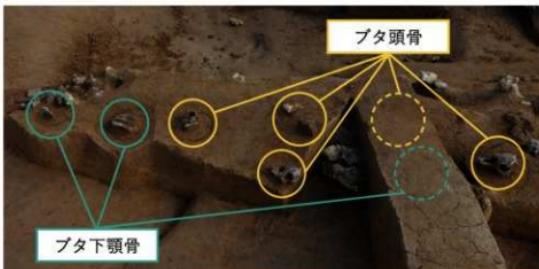
19号墓より出土したブタ頭骨2個体

## Column II

### 並べられたブタの頭！？

普天間古集落遺跡（宜野湾市）では、集落へつながる道の脇に掘られた溝の中から、ブタの頭骨が複数出土しました。

頭骨は集落外のお墓の方向を向いて並べられていることから、かつて旧暦の2月上旬に行われた行事「シマクサラシ」との関連性が考えられました。シマクサラシは地域により様々な方法がありますが、骨付きの肉を括りつけた縄を結界として集落のはずれに張り、動物の血のついた小枝を家の四方に刺すことで集落や家に悪霊や疫病などが入らないようにする行事です。普天間古集落ではブタの頭をシマクサラシに使用し、その後、溝の中に埋めた可能性があります。



ブタ頭骨出土状況（普天間古集落遺跡／宜野湾市）



ブタ頭骨近景



ブタ頭骨・下顎骨

## Column III

### 壺の中のブタの骨

喜友名グスク（宜野湾市）では、溝の中から碗を中心とした大量の陶磁器が出土し、壺の中にはブタの骨が入っていました。

このブタの骨を観察すると、頭骨や脚の骨に切断した痕が確認されたほか、頭頂骨は脳髄を取り出す目的で斜めに切断されていることが分かりました。切断面から鋭利な刃物で叩き切ったと考えられます。また、目的は不明ですが、歯の噛み合う面を強く削るといった加工が施されていました。宜野湾市の民俗事例から、切断され、まとめて壺の中へ保管された骨は、製糖期などの多忙な時期に汁物の出汁として使用されていたと考えられます。



溝内遺物出土状況（喜友名グスク／宜野湾市）



壺とブタの骨

# 骨製品



遺跡からは、動物の骨を利用した様々な道具や飾りが見つかります。動物の骨は軽くて硬いことから優れた材料として評価されていたのでしょう。ここでは、沖縄県の発掘調査で見つかった骨製品の中から、代表的なものほか、意外なものもあわせて紹介します。

## 骨針こっしん

糸通しの孔があり、縫い針として使用したと考えられます。魚の棘を使ったものもあります。



左2点：魚棘製／大原第二貝塚B地点（久米島町）  
右2点：魚棘製／シヌグ堂遺跡（うるま市）

## 骨錐こっすい

先端を錐状に尖らせ、孔を開けるために使われた道具と考えられます。



左・中央：イノシシ骨製／シヌグ堂遺跡（うるま市）  
右：ジュゴン骨製／シヌグ堂遺跡（うるま市）

## 刺突具しとつき

端を尖らせ、突き刺す機能をもたせています。狩猟・漁撈活動での使用が考えられ、エイの尾棘やクジラ骨製のものがあります。



エイの尾棘製／大原第二貝塚B地点（久米島町）



クジラ骨製／古我地原貝塚（うるま市）

## ヘラ状製品

端を斜めに切り取り、尖らせるように加工したものであります。イノシシ骨製や鳥骨製のものがあります。



イノシシ骨製／シヌグ堂遺跡（うるま市）

## 丸玉

骨を球状に加工し、中央に孔を施したものであります。



素材不明／首里城跡 黄金御殿地区（那覇市）

## 有孔製品

イヌやイノシシの歯、サメの椎骨に孔をあけたものです。ペンダントなどの垂飾品と考えられます。



左：イヌ骨製／シヌグ堂遺跡（うるま市）  
右：イノシシ骨製／古我地原貝塚（うるま市）



サメ椎骨製／古我地原貝塚（うるま市）

## かんざし 簪

棒状に加工し、先端付近に孔を施したものです。ジュゴン骨製やクジラ骨製のものが多いですが、表面に模様を施したシカ骨製もあります。シカは当時の沖縄諸島には生息していないため、本土から沖縄に持ち込まれたと考えられます。



ジュゴン骨製／古我地原貝塚（うるま市）



シカ骨製／古我地原貝塚（うるま市）

## 骨輪

クジラやジュゴンの肋骨を環状や半環状に加工したものです。イノシシ牙製のものは、犬歯を利用したものです。腕につける装飾品と考えられています。



クジラ骨製／シヌグ堂遺跡（うるま市）



イノシシ牙製／  
シヌグ堂遺跡・古我地原貝塚（うるま市）



ジュゴン骨製／津堅島キガ浜貝塚（うるま市）

## 蝶形骨製品

骨を蝶のような形に加工し、表面には文様を施すものです。単体で蝶形となるものや複数を組み合わせて蝶形となるものがあり、呪術的な要素をもった装飾品と考えられます。素材としてジュゴンが多く、その他ウミガメやイノシシ、クジラ、魚が使われています。

## 骨鏃

矢の先端に取り付ける鏃です。ジュゴン骨製のものが多く、鉄鏃を真似たものと考えられます。



素材不明／首里城跡 漏刻門跡（那覇市）

## 梳櫛の部品

中国に系譜がある両歯櫛の部材と考えられます。骨を半月状に加工し、中央に孔を施すものもあります。首里城跡や大友府内町遺跡（大分県）で似たような製品が出土しています。



素材不明／  
首里城跡 繼世門北地区・御内原東地区（那覇市）

## 吸口

丁寧に加工されたクジラ骨製のキセルの吸口です。



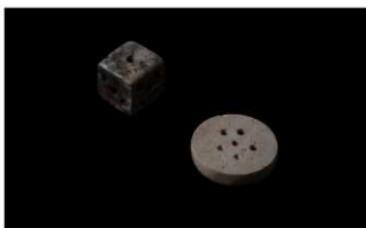
クジラ骨製／辯山遺跡（浦添市）

## ボタン

円盤状に加工され、中央には糸を通すための孔が施されています。現在とほとんど変わらない形をしています。



素材不明／首里城跡 真珠道跡（那覇市）



素材不明／首里城跡 黄金御殿地区（那覇市）

## サイコロ・円盤状遊具

サイコロは現在と同じ形で1～6の点が施されています。勝連城跡（うるま市）では、加工途中のサイコロが確認され、ジュゴンの肋骨を利用したことが分かっています。

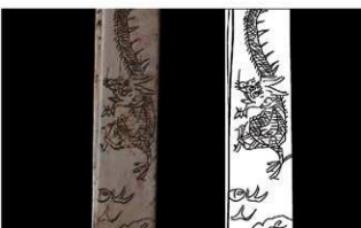
円盤状遊具は骨を円盤状に加工し、表裏面に6つの点が刻まれる製品です。石製の類似資料が今帰仁城跡（今帰仁村）で確認されており、盤上遊具などの駒として使用されたと考えられます。

## 彫刻製品

骨を板状に加工し、表面に龍や雲の模様を施したもので、板状に加工した骨を金具で組み合わせていますが、用途は分かっていません。



素材不明／首里城跡 黄金御殿地区（那覇市）



## 歯ブラシ

ウシの脚の骨などの長い骨を削って丁寧に磨き、先端にウマなどの動物の毛を植えて作られています。形は現在の歯ブラシと余り変わりませんが、掛け具に青銅やプラスチックを使っているのが特徴です。

現在の「株式会社ライオン」が大正ごろに製作した「萬歳歯刷子（ばんざいはぶらし）」と呼ばれる製品も出土しています。

昭和に入ると、セルロイドなどのプラスチック製品に押され、骨製の歯ブラシは徐々に姿を消していきます。



素材不明／首里城跡 真珠道跡（那覇市）

## Animal BONES

### ウスピラ（脱穀具）

ウスピラとは先島地方で使用されていた骨製の脱穀具です。形状はウシの肩甲骨の平らな部分にU字型の凹みを作り、そこに稲穂を引っ掛けて、手前側に引っ張ることで穂を外す仕組みになっています。

詳しい年代は不明ですが、尻並遺跡（宮古島市）出土のウスピラは全体の形がほぼ残っており、U字の窪みが摩耗しているため長く使われていたことがわかります。



ウシ骨製／尻並遺跡（宮古島市）



使用イメージ図

# 骨に残る痕跡



## 調理や製品製作など

出土した骨には昔の人が残した痕跡がみられることがあります。変色や煤などの火を受けた痕跡、解体や製品の素材を切り取る際につけた傷（カットマーク）などがあり、これらを観察することで当時の人がどんな目的で、どんな道具を使っていたのか知ることができます。

脚の骨の表面や関節周りなどにみられる傷は、肉を切ったり、関節を切り離す際につけたと考えられ、実際に骨を観察してみると数本の細かい傷が確認できます。



左：ブタカイノシシ幼獣 右脛骨（普天間古集落遺跡／宜野湾市）  
右：ウシカウマ 肋骨（首里城跡 東のアザナ地区／那覇市）



肉切り包丁や斧のような分厚い刃物が当たった結果できたとみられる、深く抉れた傷跡も確認されています。

ウシカウマ 中手骨 or 中足骨  
(神山古集落／宜野湾市)



魚の咽頭骨にみられる細く鋭い傷は、魚の頭を切り離す際に刃物が当たってできたと考えられます。

コブダイ 下咽頭骨  
(首里城跡 右掖門及び周辺地区／那覇市)



左：ウマ 左桡骨と尺骨（焼骨）（首里城跡 東のアザナ北地区／那覇市）  
右：ヤギ 左大腿骨（首里城跡 東のアザナ北地区／那覇市）

ねじれたように折れた状態をスパイラルフラクチャーと呼びます。新鮮な骨を打ち割った際に生じるとされ、骨の中の骨髓を得る目的で打ち割った可能性があります。首里城跡出土のウマの骨は火を受けた痕跡もみられます。



■角鞘を削りだした跡  
■角の切断箇所

角鞘を削り剥がしたと考えられるウシの角（東村跡／那覇市）



## 最後に

現在はスーパー・マーケットにはすでに切り分けられた肉が並び、魚をさばく機会も減ったため、あまり骨を見たり触ったりする機会がありませんが、フライドチキンやソーキ（ブタのあばら骨の肉）、テビチ（ブタの足）の骨を注意して見てみると、肉を切ったり骨を切断している痕を見ることができます。

現在でも、残った骨はただ生ごみとして捨てられるだけではなく、一部の骨はスープのだしをとるために煮込まれたり、牙や角はアクセサリーとして加工されたりと、動物骨は人々の暮らしのあちこちに根付いています。皆さんも身近にある動物骨を観察してみませんか？

## 参考文献

- 上原 駿 1986 「グスク時代・近世出土の円盤状製品」『読谷村立歴史民俗資料館紀要第10号』読谷村教育委員会歴史民俗資料館編
- 沖縄県教育庁文化課 1978 「津急島・キガ浜貝塚発掘調査報告書」
- 沖縄県教育庁文化課 1980 「大原・久米島大原貝塚群発掘調査報告書」
- 沖縄県教育庁文化課 1985 「伊江島 具志原貝塚の概要」
- 沖縄県教育庁文化課 1985 「シヌグ島遺跡 - 第1・2・3次発掘調査報告書」
- 沖縄県教育庁文化課 1986 「下田原貝塚・大泊浜貝塚 - 第1・2・3次発掘調査報告書」
- 沖縄県教育庁文化課 1986 「地荒原遺跡 - 県道10号改良工事に伴う発掘調査報告書」
- 沖縄県教育庁文化課 1987 「石川市古我地原貝塚 - 沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（6）」
- 沖縄県教育庁文化課 1999 「喜友名グスク・喜友名貝塚 - 宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a 「首里城跡 - 管理用道路地区発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b 「首里城跡 - 下御庭跡・用物堀跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003a 「首里城跡 - 右掖門及び周辺地区発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003b 「尻並遺跡 - 那覇地方裁判所平良支部建設に伴う発掘調査」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 「真珠遺跡（I） - 首里城跡真珠道跡地区発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 「新城下原第二遺跡 - キャンプ瑞慶園内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007 「首里城跡 - 黄金御殿地区発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2008 「企画展 原始人の知恵と工夫 天然素材（貝・骨・角・牙）の活用」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009 「首里城跡・真珠道跡 - 首里城跡守札門東側地区・真珠道跡起点及び周辺地区発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015 「キャンプ瑞慶園内病院地区に係る文化財発掘調査報告書2 - 普天間古集落遺跡 - 普天間後原第二遺跡 - 普天間下原第二遺跡 - 普天間石川原遺跡 - 」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016 「キャンプ瑞慶園内病院地区に係る文化財発掘調査報告書3 - 普天間古集落遺跡 - 」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017a 「キャンプ瑞慶園内病院地区に係る文化財発掘調査報告書4 - 普天間古集落遺跡 - 普天間後原第二遺跡 - 」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017b 「東村跡 - 沖縄県立埋蔵文化財センター建設に伴う緊急発掘調査」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017c 「首里城跡 - 御内東原地区発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2018 「首里城跡 - 東のアザナ北地区発掘調査報告書 - 」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019a 「神山古集落 - 普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019b 「大嶼村跡 - 那覇空港事務所官制塔庁新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2021 「中城御殿跡（首里高校内） - 横園跡 - 首里高校校舎改築に伴う発掘調査（II） - 」
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2022 「普天間石川原第一遺跡 - 普天間グスクニー遺跡 - 普天間下原古墓群 - キャンプ瑞慶園内東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査報告書 - 」
- 恩納村史編さん委員会（編） 2020 「恩納村史 第2巻 考古篇」
- 勝連町教育委員会 1990 「勝連城跡 - 北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査 - (1)」
- 宜野湾市史編集委員会 1985 「宜野湾市史 民俗」 宜野湾市島袋精美 1991 「いわむる「蝶形骨器」について」「南島考古No.11」沖縄考古学会
- 菅原広史 2019a 「奥首川流域古墓群ミーチェ地区19号墓出土の獸骨埋設構造」『ミーチェの古墓群』金武町教育委員会
- 菅原広史 2019b 「近世・近代の人々の暮らしと動物の関わり - 遺跡から出土する動物の骨から考える - 」「耀り出された戦前の沖縄 今と元年度企画展示図録」
- 高宮廣衛・知念勇（編） 2004 「考古資料大観 第12巻 貝塚後期文化」小学館
- 玉木順彦 1996 「民俗学からみた伊祖の入め御拌頭額」「伊祖の入り御拌頭額 - マンション建設に伴う近世墓の発掘調査 - 」浦添市教育委員会
- 北谷町教育委員会 2007 「伊礼原遺跡 - 伊礼原B遺跡 - か発掘調査 - 」
- 仲座久宜 2012 「トリの個入れとその用例について - 首里城跡及び首里城跡出土品から - 」「紀要埋文研究7」沖縄県立埋蔵文化財センター
- 今帰仁村教育委員会 1991 「今帰仁城跡発掘調査報告II」
- 盛本 熊 1988 「奄美・沖縄出土の鼈文・弥生時代の鹿角骨製品について」『文化課紀要 第5号』沖縄県教育委員会文化課
- 盛本 熊 2022 「首里城跡出土のサル骨考」「南島文化45号」沖縄国際大学南島文化研究所
- 読谷村史編集委員会 1995 「読谷村史 読谷の民俗 下」読谷村役場
- 読谷村史編集委員会 1998 「読谷村史 読谷の民俗補遺及び索引」読谷村役場



.....  
MEMO



A large, empty rectangular area with a black double-line border, intended for writing notes.

## 文化講座のおしゃらせ

### 第95回文化講座

日時	令和5年11月5日(日) 14:00~15:30(受付13:30)
場所	沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室
テーマ	「動物の骨で作られた道具たち -その作り方と使い方-
講師	廣岡 凌(当センター主任)
受講料	無料
定員	60名程度



### 沖縄県立埋蔵文化財センター

休所日 月曜日(国民の休日・慰靈の日にあたる場合は翌平日に振替)

国民の休日(こどもの日・文化の日を除く)

年末年始(12/28-1/4)

慰靈の日(6/23) ※その他臨時休所あり

開所時間 9:00-17:00(入所は16:30まで)

住所 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

電話番号 25 098-835-8752/8751

WEBサイト [沖縄県立埋蔵文化財センター](#)

